

# 新たな時代の未知なる道筋

## — 地域よ、鶏口となろう。牛後となるなかれ

千葉県地方自治研究センター顧問 前衆議院議員 若井 康彦



衆議院議員時代は、大変お世話になりました。慌ただしく月日は巡り、迎えた2016年。昨年は世界各地でテロと紛争が頻発したが、年が明けると、いきなり北朝鮮の核実験、サウジとイランの断交と世界情勢はさらに不安定さを加速している。中国の覇権主義が言われるが、世界規模でブロック化、分断と囲い込み、悪しきナショナリズムの流れが加速している。国内では、アベノミクスのかげ声もむなく株価は暴落、経済は停滞し、格差は拡大、社会保障の不安定さが増し続けている。年明け早々、国会は開幕したが、相変わらずの粗略な政権運営にも関わらず、安倍政権の支持率は相変わらず高止まりしている。野党がまとまらないこともあるが、わが国を取り巻くこうした国際情勢への国民の不安と漠然とした恐怖、心許なさのもたらすものだろう。今年も参院選の年、こうした状況に流されることなく、わが国独自の立場に立ち、巻き込まれない強さをもって地道にできることを積み重ねるもうひとつの外交軸をしっかりと提示していきたい。

この混迷の中でどのような道筋を描いたらよいのか。このような時こそ『地域』の役割が大事だ。人々の暮らしを支える、究極の安心のベースは地域しかない。

そこである雪深い山国の村の話。今日、人口は2千人足らず、高齢化著しく、65歳以上が49%。正に消滅危機、意気消沈かと思いきや、どっこいそう簡単な話ではなさそうだ。誰もが心に余裕を持ち、心地よさそうに暮らしている。驚くべきことに生活保護が一人暮らしの一世帯のみ、と言う。

どうやら以下のような事情のようだ。村では誰もが畑で何かしら作り、山で何か採ってくる。隣同士でそれらを物々交換する、それで培ったつてを通じて互いに時間と手間を融通し、助け合う。役場は地域の相互扶助をバックアップし、補完しながら住民サービス、社会保障を提供する。少ない年金もそれしか手だてのない都会と違ってなかなか使い道がある。正に、自助・共助・公助の仕

組みが見事に生きている。

もうひとつ、人材育成と地域資源の話。このような自助・共助・公助の仕組みの中に、無条件でにわかによそ者が入り込むのは難しいはずだが、少ないながらU・Iターンもあり、ちゃんと若者や外国人がいる。そこからムラにぴったりの人材を見つけ出して、ムラの流儀でキーマンに育てればいい。

地方にはどの地域にもこれまで積み重ねてきた資産がある。先達の残した様々な置き土産だ。時の経過、時代の変化の中で使命を終えたかに見えるが、これらが新たに「ヒト」を引き寄せる発信源、これが地域資源だ。今、全く違う社会背景の中、意味合いの異なる価値が生まれる。古い街並然り、伝統食材然り、B級グルメ然りだ。全く新しいものを創る、ではなく、既にあるものを異なる設定の中に置き換えるのだ。これらをプロデュースするキーマン（もしくはキーウーマン）がいるだけで、これまでくすんでいた全てが光を帯び、やがて輝き出す。

まちづくりとは寄ってたかってそのひとりを育てることではないだろうか。もしかしたら自分は宝のヤマに座っているかもしれないとの予感があり、充実感が得られ、他でなくてこの地域でよかったと思うようになる。そんな住民がひとり増え、ふたり増え、いつしか地域の空気となっていく。人口一万人の地域がひとりのキーパーソンを産めば、単純計算すれば人口一千万人の地域に千人単位の創造的企業が産まれたと同等のインパクトがある答えになる。いいではないか、そんな地域が千、産まれれば。

遅まきの「地方創生」が、交付金と言う名の補助金バラマキと自治体の事務の積み上げに終わらぬよう祈りつつ、今年は改めて現場に足を運びたい。自由な発想、新たな立場に立ち、初心に戻って内外の地域づくりに関わっていく所存です。

紙面が尽きた。自治研活動が地域再生のチャンネルとして充実し、発展することを期待したい。